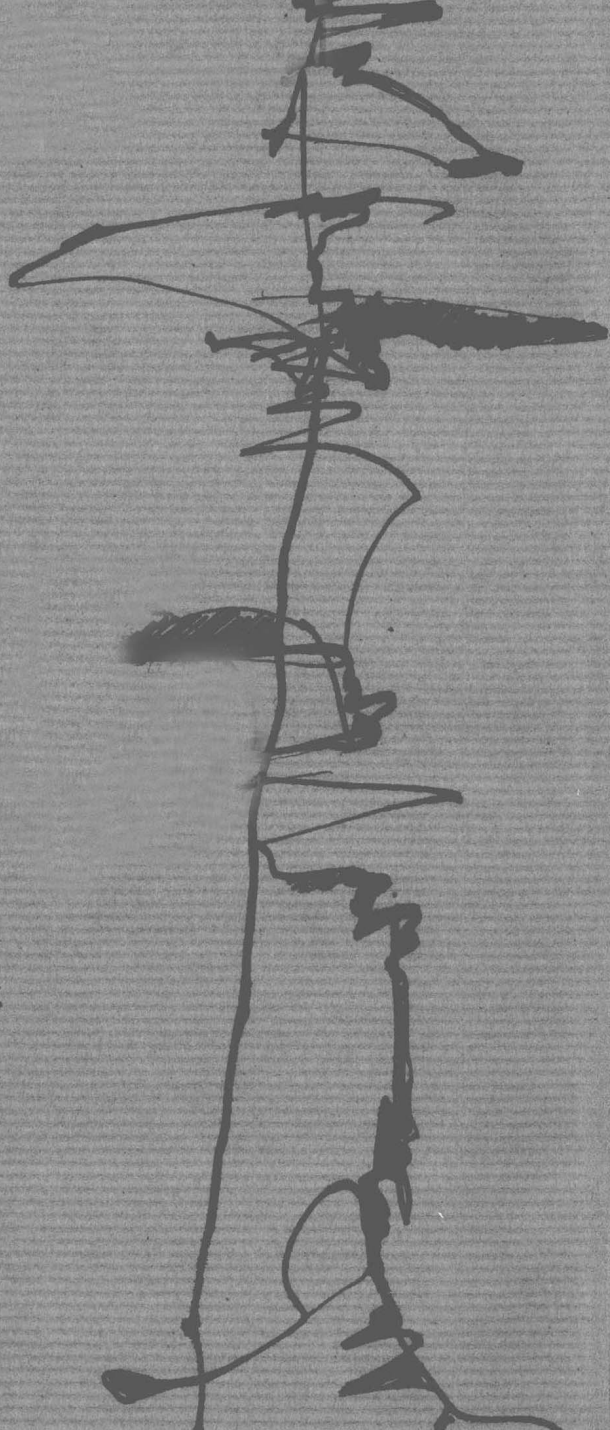


われどろ唇

多岐川恭

講談社版



吸^すわれざる唇^{くちびる}

昭和37年 1 月 30 日 第1刷発行

著 者 た き がわ きよう
 多 岐 川 恭

¥ 340 発 行 者 野 間 省 一

印 刷 所 豊 国 印 刷 株 式 有 限 公 司
(藤沢製本)

発行所 東京都文京区
 東區 3-1-19
 音羽 3-1-19
 電話 441 大代表 3111 株 式 有 限 公 司 講 談 社

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

© Kyō Takigawa 1962.

目 次

夫のふるさと	陰のある女	夜の習慣	ウイスキー	二つの死	姉妹	ロマンスの果	流離	とざした心	桃屋ホテル
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
118	106	93	81	69	56	44	32	19	7

み	静	残	熱	裂	疑	霧	た	追
ず	かな	る	海	け	惑	晴	ま	
う	なる	秘	の		の	れ	ゆ	
み	破綻	密	宿	目	人	ず	ら	放
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
229	217	204	191	179	167	155	142	136

裝幀
題字
越
塩
光
代

難波
田龍
起

吸
わ
れ
ざ
る
唇

桃屋 ホテル

一

五号室のドアは、内に向かって開いていた。戸口に新猛夫が立ってこちらを見ていた。茫然自失した様子が、グッと落ちた肩でわかった。

廊下にいた垣内京三は、叫び声を口の中で押し殺し、小走りになった。他の者も、そのあとを走った。

「どうしたんだ。依子さんがどうかしたのか」

すると新猛夫は暗い目をし、答えずに、室内へ入れという身振りをした。

その部屋は、半分が洋室、奥の半分が和室という体裁になっていた。垣内たちは、一段高くなった和室の隅、半間の床の前に、塩地銀吾が丸くなって倒れているのを見た。頭髮が血にまみれ、畳も赤く染められていた。

「塩地君」

垣内が駆け寄ろうとするのを、新猛夫が強い力で引き戻

した。

「触らないほうがいいでしょう。死んでいますから」

新の声はしわがれていった。

「君はいつここへ来たんだ。依子さんはどうしたんだ。君が来た時は……」

「いませんでしたな。ご覧になっている通りの状態でした。女中が通りかかったので、知らせに行かせたんです」
「依子さんは確かにこの部屋にいたはずなんだぞ。だからおれは心配していたんだ。いったい、どうして……」

垣内がそう言った時、玄関のほうで「部長さあん」とお女将の荒川たつ子の叫ぶ声がした。さわがしくなっているようだった。垣内はまた廊下を走って引返した。

古城依子は玄関に立っていた。いや、立っている力はほとんどないようだった。依子の脇に手を回し、肩を貸して支えている男は、守衛の淵上唯一で、制服は脱いで普通の古ぼけた背広を着ており、しわの多い顔をこわばらせ、睨むように、だれかれを見回していた。垣内は飛びおりて下駄をつっかけた。

「依子さん、どうしたことなんです。君、淵上君、君はどうしてまた、ここへ来てるんだ」

依子は答えなかった。淵上唯一も口をとぎしていた。淵上は興奮のあまり、口がきけないらしかった。

「庭のほうから、回ってこられましたんです。ちょうど私

は、外から帰って来たところで、変に思つて呼びとめたら、いきなり逃げ出そうとされるんで……お客様とは知りませんでした」

と、かたわらに立っていた番頭が、息を切らしながら言つた。

和服の依子は、衣紋を乱していた。襟元がひろがり、裾が割れて、白い膝頭とはぎが見えた。白足袋は泥でよごれ、スリッパをはいていた。そういうかっこうで淵上に寄りかかり、目を閉じている。顔には血の気がなかった。

「依子さん、しっかりするんだ。依子さん」

垣内は依子の肩をつかんでゆすぶつた。依子は抵抗がなくて、かすかに目を開いてまた閉じた。

五号室の方角から、女中たちの悲鳴と、多くの足音が廊下を伝つて来た。

「新君、依子さんをどこかで寝^{やす}ませて、介抱してあげてくれ。淵上君も付きそつてくれ。お女将は警察へ電話して。それからだれも外へは出さんように見張らせてくれ」

垣内はそういう指示を与え、また五号室に取つて返した。

女中たちと、二、三の宿泊人が、戸口からこわごわと中をのぞいている。垣内たちはそれをかき分けて、室内に入つた。

「その窓から出たんでしょな」

と、営業部長の水谷が言つた。洋室のほうに大きな開き窓があり、外に向かつてあいている。闇の中に白い塀が見える。塀と建物との間の狭い通路を歩いて行くと、玄関に出るのだ。

「守衛の淵上が、いつここへ来ていたのかな。どうして奥さんがいることを知つたのかな。さっぱりわからん」

技術部長の畑中が首をひねつた。この五号室で何が起こつたのか、かんじんのことについては三人とも触れるのを恐れていた。

人事課長の塩地銀吾は、うつ伏せになり、首をこちらへ半ばねじ曲げたような姿勢で死んでいる。垣内はスリッパを脱いで和室に上り、死体のそばにしゃがみこんだ。

「ひどくなぐられてるんだな。この傷は……ああ、水谷君、これでやつたんだよ」

床の間にゴルフ・クラブが投げだしてあつた。ヘッドの部分が血ぬられてるのがわかる。

「アイアンの二番かな」

のぞき込みながら、水谷部長がつぶやいた。その時、室内に入ったものがある。

「かわいそうに。働き盛りだったのにな。依子さんはどうだい、新君」

そう言つて振り返つた垣内は、声をあげた。新ではなく、蒼白な顔の古城益美が立っていた。依子の夫で、九州

の支社に勤めているはずであった。

「古城君じゃないか。君までここに来ていたのか。君は支社に居るはずじゃないのか。われわれに知らせずに、どうして上京しているんだ。出張を命じたはずはない」

古城益美は答えなかった。黙って和室の隅に転がった死体を見ていた。動かない、凍りついたようなひとみであった。極度に緊張しており、その凄愴な気魄のようなものが、垣内に、これ以上彼を責めることをためらわせた。

「別室に依子さんが寝んでいるはずだ。行ってあげたまえ」

二

「依子さんには、当然いろいろご質問があると思いますが、相当ひどいショックを受けておられるので、一番あと回しにしたいんだけど、ご配慮を願いたいです……」

応接室に、垣内は年輩の警官と向かい合った。中野署の岩本という警部だった。もう一人、筆記具をもった若い警官がいた。

「古城依子さんは、もとうちの会社の社長をやっておられた古城巖太郎氏のお嬢さんです。現在、やはりうちの社にいる古城益美君と結婚されています。三年前でしたが、私が仲人のような形になりましたね。依子さんがあの部屋に居られたのは、どうも困った問題ですが、犯罪には絶対に

関係ありません。依子さんの人柄から、そういうことは不可能なんですから、これだけは申しあげて置きます」

垣内が問われない先に話すのを、岩本は苦笑しながら聴いていた。

「あなたはスター軽車輛工業の取締役、総務部長ですね。ご一緒の人たちは？」

「私を入れて四人おりました、営業部長の水谷君、技術部長の畑中君、それに宣伝課長の新君です」

「今晚の会合は、どういう？」

「新しい四輪車の設計ができましたので、技術部長の説明を聞きながら、営業部門の意見を徴する、といったようなことです。売れる売れないは、純技術部門の考えばかりではうまく行かないものでしてね。それに、社員のベース、アップの問題もありました」

「定期的にこの旅館を使用されるわけですか？」

「ええ。桃屋ホテルは、以前から指定旅館になっておりまして、ちょっとした会合は、みなここの小宴会場でやります」

「一応、みなさんがここへ来られてからの動静をお聞きしましょう。来られた時間は？」

「私は、午後七時に着きました。他の諸君は私より先に來ていたの、正確なことはわかりません。食事を始めたのが七時半、それからズルズルと議題に入ったわけです」

「九時半ごろまでの間に、部屋の外に出た人は？」

垣内は煙草の渦のなかで、目を細めて考えた。

「さあ……みんな一、二度は出たようですな。小用に立ったり、電話を掛けに行ったり、よく憶えていませんが、私自身も一度出ました。九時過ぎでしたか、知人へ電話を掛けたに……」

「玄関にある外線の電話ですね。その時には何も変わった様子はありませんでしたか」

「ありません。その後部屋に帰ってしばらくすると、お女将がそっと私を呼ぶので出てみました。依子さんがさっき見えたというんです。しかも、塩地君を訪ねて来たのだと言う……その時まで、塩地君が来ているとは知らなかったのです。お女将が口留めされていたのだと思います。しかし彼女は依子さんのお父さん、つまり鮎太郎氏にはかなり世話になっている人なので、事態を重大だと思ったのです。私もびっくりして、非常に心配になりました。つい同室の諸君にも話したわけです。とうとう、どうにも落着いていられなくなって、五号室へ出かけてみることにしました」

「ちょっと。みんな一緒に出たのですか？」

岩本がやや強い目付きになった。

「新君が少し先に出了ました。と言っても、二、三分くらいのものでしょう。行ってみると、戸が開いていて、新君が

まるで幽霊みたいに立っている。目頃活動的で豪放な男が、ションボリ立っているの、ドキンとしました。何かあったな、という気はしたのですが、まさか塩地君が殺されていようとは思いませんでした」

垣内は神経質に煙草を続けたまに吸った。こめかみの血管がビクビク動いていた。若い警官が、岩本に何かさやいた。岩本は「つまらない」という顔をしたが、質問を取り次いだ。

「きょうの会合は、前もって決めてあったのですか？」

「前もって……と言いましたが、きのうの退社時に各人に連絡したのがね。塩地君は人事課長ですが、ベース・アップの話はまだ具体的な段階ではないので、呼ばなかったわけです」

岩本はうなずいて、しばらく沈黙していた。質問は核心に入るようだった。

「ご承知のように、異常な状況ですな。れっきとした人妻が、夜分に、こういう旅館で男と同室する……あなたも非常に心配したと言われましたね。二人の間に情交関係があったのじゃありませんか」

「情交関係？ そんなばかな」

垣内は腹立しげに笑い出した。

「それは依子さんをご存知ないから、そんな想像をされるんですよ。そういうみだらな女じゃない」

「じゃあ、心配する必要はないでしょう」

垣内は、仕方がないという笑顔になった。

「私が心配したのは、依子さんが意志に反して……つまり何らかの手段で、塩地君に自由を奪われる場合のことを考えたからです。塩地君は仕事のできる人事課長で、私も信頼していたのですが、正直なところ、女ぐせだけはよくありませんでした。これまでも、いろんな女出入りがありました。おだやかに注意するくらいで済ませていたのですが、依子さんに野心を持つということは、ほかのことと違って、許せない。私としては見逃せないわけです。塩地君が依子さんに付きまといているという噂はちょいちょい私の耳にも入りました。嚴重に叱ったこともあります。本人はどうも、反省の色がありません。すっかり魅入られてしまったんですね。尤も依子さんのような女性なら、ほれた相手が氣違ひのようになるのは男としてよくわかりますが……」

「しかし、女のほうでも、自発的にやって来ているんですよ」

「知っています。お女将にお聞きになるとわかりますが、もう何度かこの旅館に、一緒に来ているんです。ただし、これまでは単に食事を共にするだけでした。お女将が氣をつけていたのです。私は、依子さんをあくまでも信じるので、九州にいる夫の古城君にかくれて、道ならぬ恋を楽し

んでいたなどという想像は考慮のほかです。依子さんは何か塩地君に弱味をつかまれていたんだ……脅迫されていたんだと思いますね」

岩本は上目使いに垣内を見た。そばにいる若い警官も彼を注視した。

「具体的に言ってください。あなたの想像でもいいです。どんな弱味を？」

「さあ、それは私にもわかりません。言えるのは、それが依子さんにとって、重大なことだという点だけです。依子さんに直接お聞きになるといいでしょう。無駄かもしれないが……」

「依子さんが被害者を嫌っていたという証拠はありませんか？」

垣内は言葉につまった。

「……まあ、そうとしか考えられませんからね。今夜私が心配したのは、依子さんがおそく来たことです。私が電話をよそへかけに出る少し前だったと言うから、九時前後と思います。塩地君はそれより前に来て待っている……お女将の話だと、七時半過ぎだったそうですがね。いつもと違うので、もしや、と大いに心配しました」

そう答えてから、こんどは垣内が聞いた。

「塩地君はゴルフのクラブでやられているようですが、死因はやはりそれですか」

「そうです。頭を四カ所なぐられています。相当な力ですよ。玄関にクラブの入った袋が置いてありますね、あれから犯人が抜いて使ったものらしいです」

「ああそうですか」

垣内は暗い顔でうなずいた。

「あれはうちの社の備品で、泊った者が使うように置いてあるんです。ここには庭に練習するところを作っておりませんからね」

犯人は、クラブ・セットが玄関にあることをよく知っている者、つまり会社内部の者ということも、一応考えられる。しかし岩本は垣内に礼をのべて、一たん引き取らせ

三

水谷営業部長と畑中技術部長は、ほぼ同じような証言をした。二人は会社から直接、車で桃屋ホテルに乗りつけた。六時半だった。新猛夫は先に着いて、小宴会場で待っていた。

「古城君の奥さんが来たというのは、垣内さんが話されたので知りました。しかしどうして垣内さんが心配そうにソワソワしたのか、わからなかったのです。塩地君が先に来ていて、その部屋へ行ったのだということは、あとでわかって驚いた次第です。垣内さんは、その点はわれわれ

に話にくかったんですな。非常に親身な立場ですからね」

と、水谷が言った。

「仲人をしたそうですね。さっきもしきりに依子さんをかばっておられましたか……」

一息入るように、岩本は笑った。

「垣内さんは、古城蔵太郎さんのまあい子飼いの人で、現在は有力な取締役だし、恩義があるわけです。しかしそれを離れても、垣内さんは親のように……いや、親と言っちゃかわいそうだが、いわば兄貴のように、昔から依子さんを愛してきたのですね。古城君とのロマンスでは、結婚にいろいろ反対もあったらしいんですが、終始依子さんの立場に立って、話をまとめあげましたからね」

畑中もいくらかくつろいでいた。

「ああいう美しい人だから、申込み者多数だね。ぼくなんかも、若くて独身だったら、イの一番に申込んでるよ……そうそう、新君もそうじゃなかったか？ 水谷君」

「そうだ。おれも一働きのしたが、だめだった。あんな男だから歯牙にもかけんふりをしていたが、当時だいぶやせたよ、彼も」

応接室に笑いがかもされた。

「私どもから見ると、品行のいい奥さんだとは思えません。夫婦仲はうまく行っているのですか」

岩本はまじめな口調に返った。水谷は困惑の表情を見せた。

「私たちは局外者なので、無責任なことは言えませんが、情報によると、あまりうまく行っていないようです。いま古城君は九州支社在勤ですが、依子さんは東京にとどまっています。もう足掛け三年、離れて暮していることになりましたかなあ……三十二年の春結婚して、翌年早々にはもう転勤だったから、一緒にいた期間は一年に満たないのです。依子さんが古城君に従って九州に行かなかったのは、どっちの意志かわかりませんが、とにかくシックリしていないことは確かです」

「妙な話ですな。恋愛結婚をした者同志が、一年経たぬうちに冷たい仲になる。しかも女のほうは、みなさんのほめていられるように、魅力のある女性だとすれば……やはり三角関係ではありませんか。例えば被害者の塩地ですな」

水谷は岩本の視線を、まぶしそうに避けた。

「社内の女の子たちの間では、そんな噂もあるようです。噂を取りあげるわけにはゆきませんからね」

「私たちの手で調べてみましょう」

と、岩本はその話を打切った。

「ところで、あなた方のうちで、守衛が上りこんだのに気付いた人はいませんか。時刻は九時ごろから、九時半ごろまでと思われませんが……」

水谷も畑中も、全く気付かなかったという返答をした。

「垣内さんが電話をかけに行かれた時間は？」

「九時十分ごろだったと思います。十分くらいして帰ってこられました」

と畑中が言った。

「十分間も電話をかけていたのですか」

岩本はそばの警官と顔を見合せた。水谷と畑中の表情に、微妙な笑いに似た影が動いたが、二人とも黙っていた。

「さっき、垣内さんにお訊きにならなかったのですか」

水谷が言った。

「ご不審ならお訊きになるといいです。黙秘するかもしれませんがね」

九時から死体発見の時刻まで、小宴会場を離れなかったことを誓って、二人の部長は新猛夫と入れ替った。宣伝課長で、出版物、ラジオ、テレビなどを通じてPRの全部を受持っているのだと、新は自己紹介した。

「宣伝というのは、相当大事でしょうなあ」

「相当以上です」

と新猛夫は野太い声で言った。壮年を少し過ぎたくらいのも、よく肥った、大柄の男で、荒い頭髪はくしけずらぬ習慣のようだった。酒の強そうな赤銅色の顔の中に、傲岸な丸い目が、訊問の警官を恐れ気もなく迎えていた。

「宣伝はますます重要になるでしょう。何よりも売ること

が眼目ですからね。技術的良心もいいが、商売をやってるんだという事実を忘れる手合が多いですからね、やりきれませんよ」

殺人とは無関係な話だが、岩本は興味を示した。

「垣内さんのお話だと、今晚の会合は、新らしい車について、営業方面と技術方面の意見の調整ということでしたな。そういう対立があるものですか」

「ありますな。技術屋は専門的に、性能のいい、耐久力のあるものを作りたい。そのためには、ある程度デザインや外觀を犠牲にしても構わないという考えだ。ところが、営業宣伝の方では、それじゃ困るのです。考え方が逆になってくる。簡単に言えば、そんな対立になります。これまで、われわれの発言力は弱かったのですが、技術屋優先の弊害は打破されつつあるんです」

「技術部門の人と衝突したことがありますか」

「あります」

と新は短かく答えた。なぜ一同より早く部屋を出て、五号室に急いだかについては、別に理由はなく、ただ無茶に気になったからだと言った。垣内の話がショックだった。垣内がそわそわしながらも腰を上げないので、業をにやしたと言うのだ。

「五号室に着いた時の状況を話してください」

「まずドアを叩いたんです。当然ドアはあかないものと思

って、叩き続けたが返事ありません。ところが、体でぶつかると、すぐあきまして。ぼくはよろけこんだんです」

「依子さんと守衛がいたのですね」

岩本が鋭い口調になった。

「いや塩地の死体のほかに、だれもいませんよ」

「それでは、二人はもう窓から逃げ出していたんだ。そういう気配は？」

「気が付きませんでしたな。ぼくは塩地のそばへ行って、死んでいるのを確かめました。だれかがクラブでなぐり殺したということを想像しました。現場はあとから来た人が見た通りです。テーブルの上には、部屋の鍵が載っていましたな。それから、垣内さんたちを戸口で待っていました。それだけです」

「あなたは、塩地が来ていることを知っていましたか？」

新の顎のあたりの筋肉が動いた。

「見当はつけていましたよ。ぼくにも噂は伝わっているの

で」

「塩地と依子さんとの間に肉体関係があったと思います

か。以前に、それから今晚……」

「思いません。今晚も大丈夫ですな。奥さんはそういう人じゃないんだ」

岩本はちょっと調子を変えた。

「あなたは依子さんに結婚を申込んだことがあるそうじゃ